

はら
原

とりで
砦

遊家配水池築造事業に伴う発掘調査報告書

2003

掛川市教育委員会

例　　言

- 本書は、平成14年12月13日から平成15年3月31日まで実施した、静岡県掛川市遊家1069番1外に所在する原岩の発掘調査報告書である。
- 調査は、掛川市水道課が計画した配水池築造事業に先立つ緊急の発掘調査で、委託者掛川市水道事業管理者株村純一、受託者掛川市長株村純一代理助役小松正明との間で「遊家配水池築造事業に先立つ埋蔵文化財確認調査委託契約書」を締結し、掛川市教育委員会が実施した。調査費用は、掛川市水道課が負担した。
- 確認調査、発掘調査、本書の執筆、編集は、掛川市教育委員会の村松弘規が行った。
- 調査では次の方々にご教示をいただいた。記して感謝する。(順不同・敬称略)
向坂 鋼二　鈴木 一有
- 本書に係わる発掘調査の記録及び出土遺物は、掛川市教育委員会が保管している。
- 挿図における方位は真北を示す。
- 挿図中の標高は海拔を示す。

目　　次

I 調査に至る経緯と調査の目的	2
II 調査の方法と経過	2
III 遺跡をめぐる環境	3
IV 調査の内容	4
V まとめ	8

挿図目次

第1図 位置図	2
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 原岩周辺地形図	4
第4図 発掘調査区全体図	5
第5図 S X01実測図	6
第6図 S X01遺物出土状況実測図	7
第7図 出土遺物実測図	8

写真図版目次

図版I (上) 完掘状況(東から)	
(下) 完掘状況(西から)	
図版II (上) 調査前遠景(北から)	
(中) Dトレンチ南端遺構検出状況	
(下) 遺構検出状況	
図版III (上) S X01完掘状況(北から)	
(下) S X01遺物出土状況(南から)	
図版IV S X01土層断面状況(C-C'ライン、D-D'ライン、E-E'ライン)	
図版V 出土遺物	

I 調査に至る経緯と調査の目的

原砦は、掛川市西部を南流する原野谷川の中流付近の左岸丘陵上に位置する中世の砦跡で、原氏が築いたとされている。原氏は、鎌倉時代に原野谷川流域にあった原田荘の一部を支配した地頭だったが、次第に勢力を増し、やがて原田荘全体を支配するようになった。南北朝・室町時代には地頭から国人領主へと転化し、市内で最大の勢力を誇った。領内には原砦をはじめ拠点となる城館を築き、本拠を原砦から北西へ150mほど離れた本郷館、詰の城は高藤（殿谷）城とした。原氏は、明応3年（1494）に佐野郡へ侵攻を開始した北条早雲率いる今川軍により、高藤城が攻め落とされると衰退し、同6年（1497）に没落した。

今回の発掘調査は、掛川市水道課が計画した原砦地内における配水池及び取付管理道路の築造工事に起因するものである。工事により遺跡の消滅が免れない事態となるため、工事前に発掘調査を行い、記録保存することになった。

II 調査の方法と経過

原砦では今回の調査とは別地点で平成8年度に確認調査を実施したことがあり、中世の陶器が表土中から出土したものの遺構は検出されなかった。今回の調査地点は前回調査よりも広範囲に及ぶため、原砦の遺構・遺物が発見されることが予想された。

調査はまず試掘溝による確認調査を行い、遺跡の遺存状況を把握することにした。調査地点の現況は茶畑と荒蕪地である。事業計画地内に幅1m、総延長240mの試掘溝を5本設定し、調査の支障となる茶樹を機械により粉碎後、重機により掘削し、作業員を投入して遺構の検出作業、写真撮影を行った。

確認調査の結果、Dトレントの南端付近で遺構と古墳時代終末期の須恵器が確認された。そこで、遺構の全容を明らかにするため、Bトレントの南側とEトレント西側の範囲を本調査の対象として、引き続き実施した。

発掘調査は重機による表土掘削後、作業員を投入した。遺構の検出・遺物の取り上げ・図面作成等は1辺5m四方の区画を任意に設定し、この区画に従った。現地での図面は、遺構全体図・土層断面図は20分の1縮尺、遺物出土状況図は10分の1縮尺で作成した。

写真による記録は、プローニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズカラーフィルム、同サイズカラーリバーサルフィルム撮影によった。また、業者に委託して水準点及び基準点測量を実施した。調査終了後、再び重機により調査区の埋め戻しを行い、現地での作業を終了した。



第1図 位置図

III 遺跡をめぐる環境

『掛川市遺跡地図』によると、原岩周辺には縄文から中世までの遺跡が比較的密集して分布している様子が伺える。

縄文時代の遺跡には、中期の安里山遺跡(2)、後～晚期の長福寺西遺跡(3)がある。

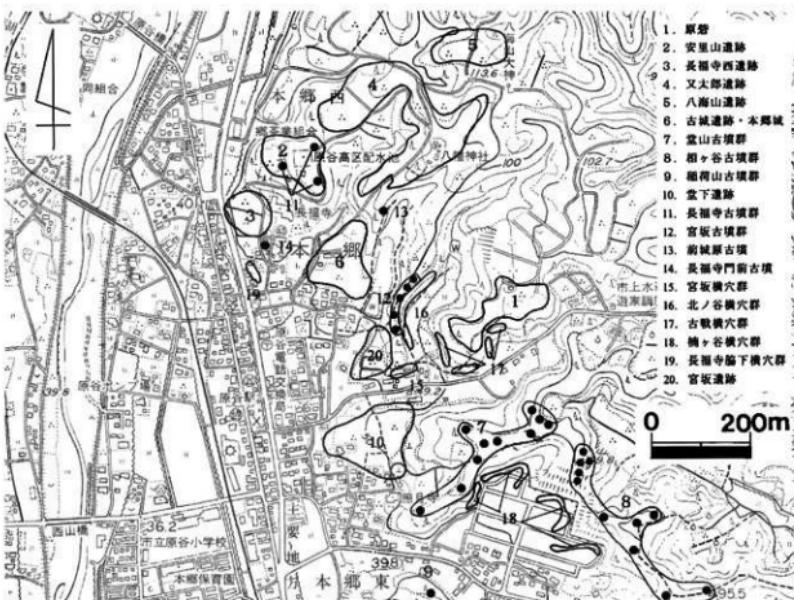
弥生時代の遺跡には、中～後期の長福寺西遺跡(3)、又太郎遺跡(4)、八海山遺跡(5)、後期の安里山遺跡(2)、古城遺跡(6)がある。

古墳時代の遺跡には、中期の安里山遺跡(2)、堂山古墳群(7)、相ヶ谷古墳群(8)、稻荷山古墳群(9)、後期の堂下遺跡(10)、長福寺古墳群(11)、宮坂古墳群(12)、前城原古墳(13)、宮坂横穴群(14)、北ノ谷横穴群(16)、古戦横穴群(17)、楠ヶ谷横穴群(18)が所在する。

奈良時代以降の遺跡には、奈良時代の古城遺跡(6)、堂下遺跡(10)、奈良・平安時代の長福寺西遺跡(3)、又太郎遺跡(4)がある。また当該地区には、神亀3(726)年に行基が創建したと伝えられる曹洞宗寺院の安里山長福寺がある。

中世の遺跡には、本郷城(6)や本報告の原岩(1)など、原氏に関係した城館がある。

これらの遺跡のうち、発掘調査されたのは古墳時代の横穴群の一部である。紙面の都合で調査成果は触れないが、分布をみると、遺跡の時代の中心は、数多くの古墳群・横穴群がつくられた古墳時代後期だといえる。しかし、全体的にみると複数の時代にまたがる遺跡が多く、当該地域の歴史を考察する上で看過できない要素であろう。



第2図 周辺遺跡分布図

IV 調査の内容

今回の調査では原砦に関する遺構・遺物は検出されなかったが、原砦の概要について若干紹介する。

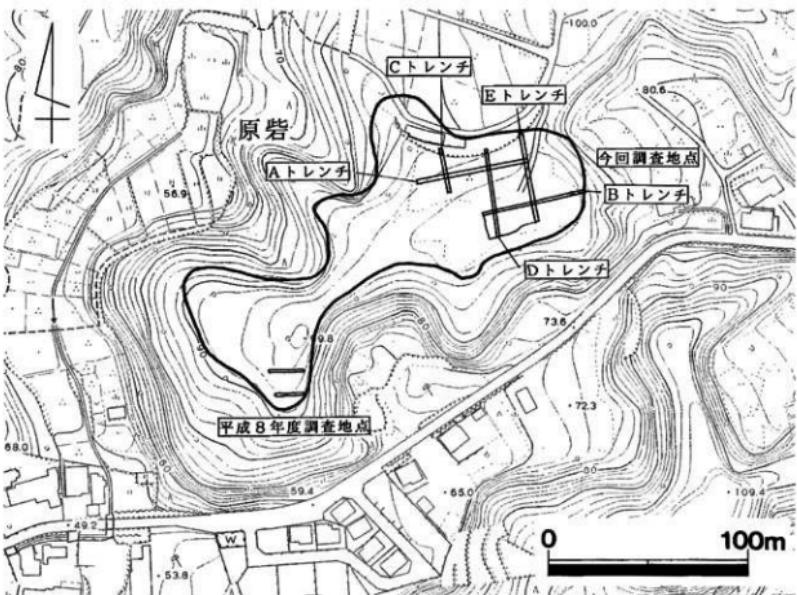
『静岡県の中世城館跡』(静岡県教育委員会)の原砦の項には、「(略) 標高100mの尾根を最頂部として東西100m、南北150mの規模で主尾根上に主郭といくつかの曲輪を配置している。主郭は主尾根の北東部の最頂部に位置し、西側に2段に曲輪を配している。砦の周囲は急峻である。」とある。調査地点は北を除く三方は崖になっているが、記述にある曲輪の配置は確認できなかつた。

事業計画予定地は東西約75m×南北約50mの範囲であるが、これには一部除外地が含まれている。最終的にはその範囲を外した事業計画に変更されたため、調査対象から除外した。

S X 01 (第5・6図)

確認調査で掘削したDトレンチの南端付近で、地山土に掘り込みがあり、赤く焼けた土が堆積しているのを見発した。また、トレンチ断面には古墳時代の須恵器が含まれていたため、同時期の遺構が遺存していると判断し、本調査に至ることになった。

S X 01は東西3.4m、南北方向は遺構南端が調査区外へ伸びるため検出長で2.1mを測る四角い遺構である。深さは地表面から北端で0.5mを測る。確認調査で検出した赤く焼けた土は、遺構



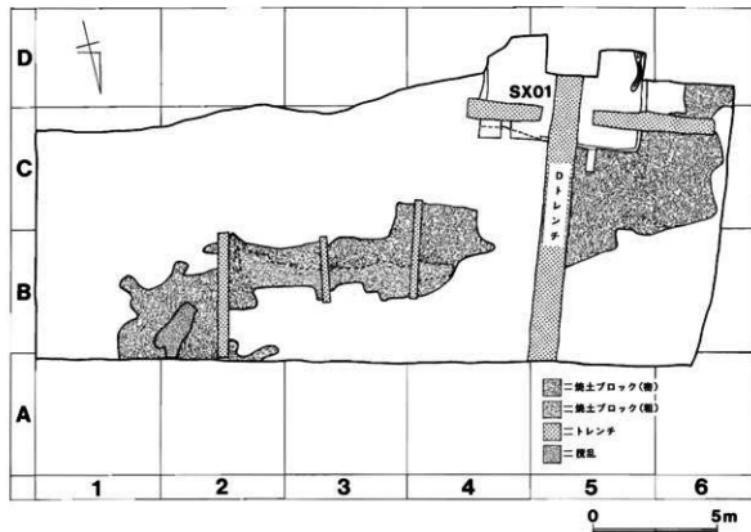
第3図 原砦周辺地形図

の覆土全体で確認されたが、焼けた土の混入状況を密度により4段階にわけて図示した。多く混入しているのはDトレンチ以西、東西方向のサブトレンチ以南である。覆土は焼けた土の他は地山土である黄褐色砂質土と暗褐色の焼土ブロック及び表土である。これらは人為的に埋められたと考えられ、複雑に堆積している。

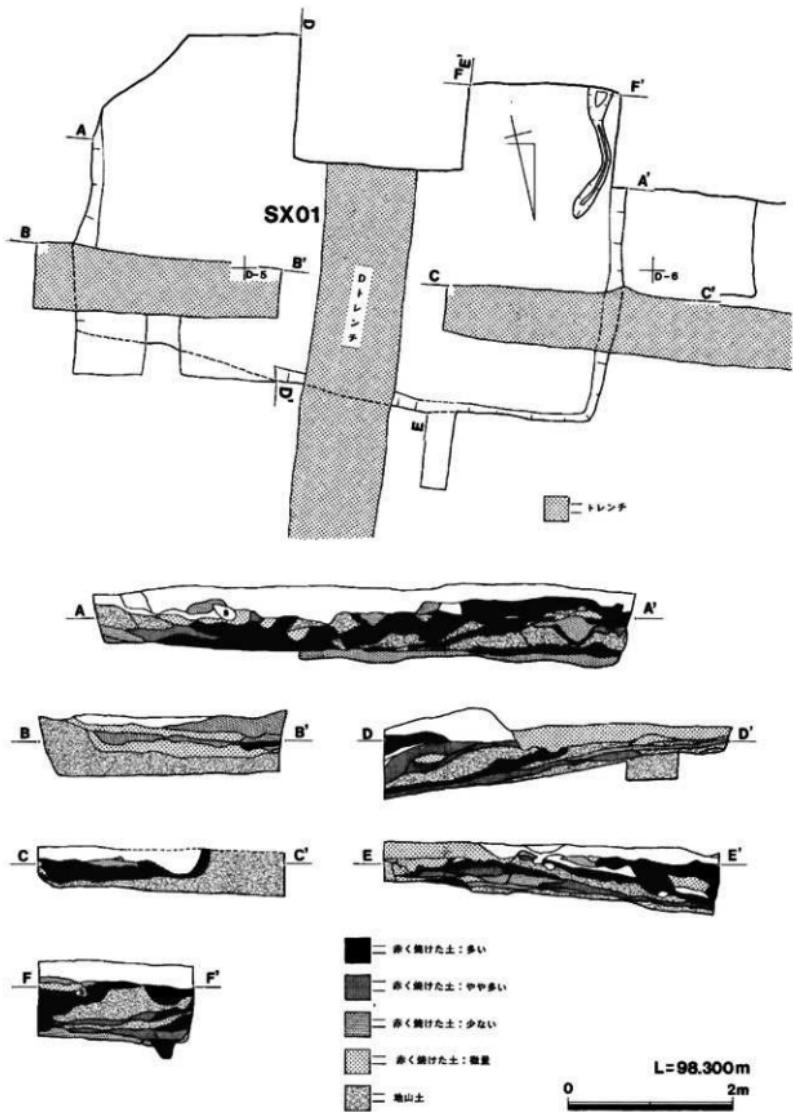
第6図で出土状況を図示した須恵器の甕はSX01の底面に近い深さで検出した。SX01の底面は南へ傾斜しており、出土状況も同様である。覆土堆積状況も同じように南へ傾斜している。今回の調査で出土した遺物はすべてSX01からであるが、甕以外は、Dトレンチ以西及びサブトレンチより南側のいずれも底面近くの深さから出土した。なお、調査区を南へ拡張した部分(A-A'ライン以南)から出土した遺物はわずかであった。

また、調査区の広範囲にわたり暗褐色の焼土ブロックが拡散している状況を遺構検出面で確認した。焼土ブロックの拡散状況は粗密があるのが確認できた。

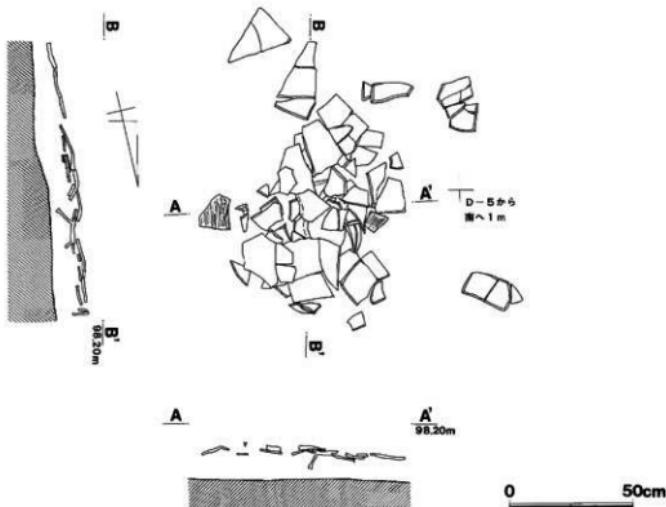
遺構の性格は検出された遺構がこれまでに市内では検出されたことがないため、向坂鋼二氏に現地視察をお願いした。そこで、SX01は工房跡、焼土ブロックが拡散している状況は平地式の炭焼窯の痕跡ではないかと推測された。その根拠として、①多量の赤く焼けた土が堆積しており火を使う行為があった、②祭祀跡なら関連遺物が出土するはずだが、それがない、③住居跡にしては大きすぎる、④出土遺物の種類に生活臭がないことなどをあげられた。しかし、炭が全く見つかっていないことや工房跡を焼けた土と地山土で埋めていることなど特異な点も多く、遺構の性格を断定するに至っていない。



第4図 発掘調査区全体図



第5図 SX01実測図

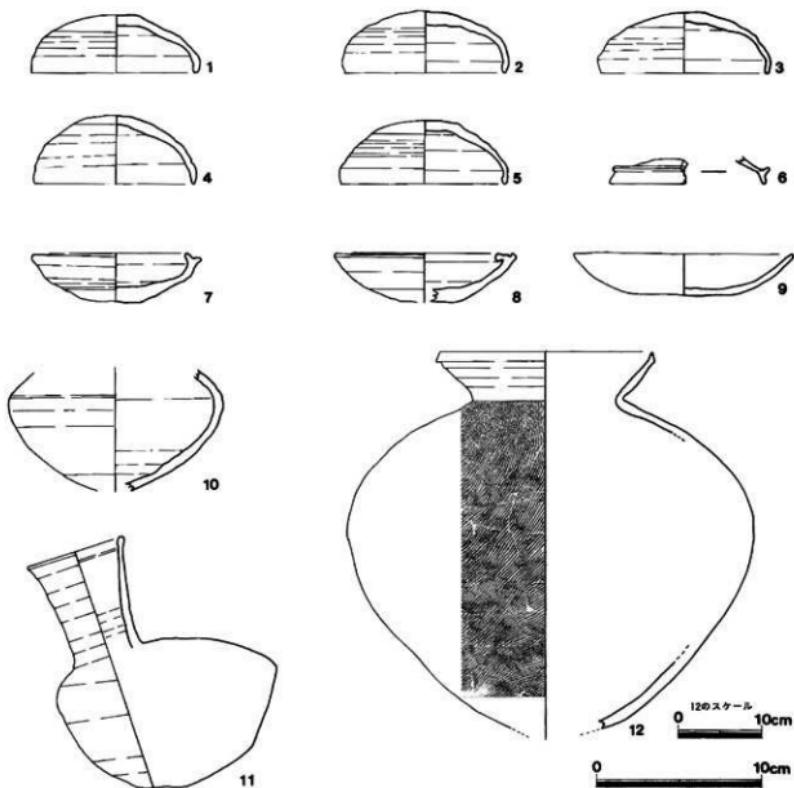


第6図 SX 01 遺物出土状況実測図

今回の調査で出土した遺物は須恵器・土師器等で総数は15点とわずかであった。ほとんどが須恵器である。

1～6は須恵器の壊蓋である。このうち1～5の口径は推定のものもあるが9.6～10.2cm、器高は3.7～4.1cmを測り、ほぼ同様の大きさである。いずれも肩部の稜線が明瞭である。6は返りのある破片で他の須恵器と時期が異なるものである。出土はSX 01からであるが、小破片であることから後に混入したと思われる。7と8は須恵器の壊身である。7は口径8.1cm、最大径10.2cm、器高3.1cmを測る。立ち上がりは内傾する。8は推定口径8.7cm、最大幅11cm、残存器高2.9cmを測る。立ち上がりが極端に内傾し、胴部の稜線は不明瞭である。9は土師器の碗の破片である。推定口径13.2cm、器高2.5cmを測る。内外面とも剥離で調整は不明瞭である。土師器は1点のみの出土である。10は須恵器の壺の胴部である。最大径は13cmを測る。肩部に自然軸がかかる。11は須恵器の平瓶で、口縁～頸部の一部を欠損する。口径6.0cm、器高15.2cmを測る。肩部から体部外面に自然軸がかかる。口縁部内面に沈線が巡る。12は第6図で出土状況を示した須恵器の大甕である。接合の結果、底部を欠損しているものの、ほぼ完形に復元できた。口径25.7cm、最大径49.3cm、残存器高46.1cmを測る。外面にタタキ痕が残る。肩部に一部自然軸がかかる。

これらの須恵器の時期は遠江編年のIV期前半（7世紀前葉）に位置付けられる。



第7図 出土遺物実測図

Vまとめ

なお、調査地点北側付近にかつて掛川市の産業廃棄物処分場があり、廃棄物を谷に捨てては周囲の山を削平した土を被せて埋め立てていたことを聞き、調査地点もその際削平されて平坦地が形成されたらしい。よって調査地点の平坦地が、原砦の曲輪跡の可能性はないと考えられる。

そのような状況の中で、古墳時代終末期の遺構が検出されたのは大きな収穫であった。現時点では、遺構の性格は炭焼窯跡と付随する工房跡と位置付けたが、得られた情報が少なく、今後同様の事例が発見された際に改めて考察したい。

図版 I



完掘状況（東から）



完掘状況（西から）

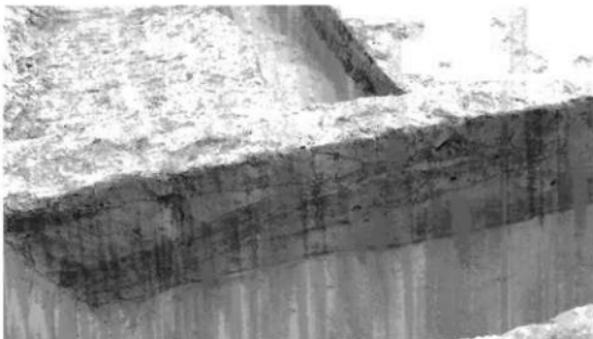
図版
II



調査前遠景（北から）



Dトレンチ南端遺構検出状況



遺構検出状況

図版 III



SX01 完掘状況（北から）



SX01 遺物出土状況（南から）

図版
IV



SX01 土層断面状況（C-C' ライン）

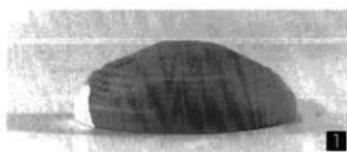


SX01 土層断面状況（D-D' ライン）



SX01 土層断面状況（E-E' ライン）

図版 V



報告書抄録

ふりがな	はらとりで							
書名	原 砧							
副書名	遊家配水池築造事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537) 21-1158							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はら 原 硯	静岡県掛川市 遊家1069-1他	22213	K-352	34度 48分 37秒	137度 57分 43秒	20021213 20030331	500m ²	配水池 築造事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原 砧	城館跡	古墳時代後期	平地式炭焼窯跡? 工房跡?	須恵器 土師器等	市内では発見例のない 遺構。遺構の性格不詳。			

※緯度・経度は世界測地系を使用

原 砧

遊家配水池築造事業に伴う発掘調査報告書

編集発行 掛川市教育委員会
 静岡県掛川市長谷701-1
 TEL (0537) 21-1158

印 刷 株式会社 彩光堂
 静岡県掛川市宮脇248-1
 TEL (0537) 24-0013